

ことばの違いから文化を読む

森 光 有 子

はじめに

英語を主な研究対象とし、さまざまな観点から英語を見ていると、他言語を研究対象とする故に見えてくる日本語の特徴に気づく。また、ことばをじっと見たり聞いたりしていると、そのことばを話す人々の文化がそこに埋め込まれていることにも気づく。

「文化」と聞くと、ある国の食べ物や着ている物を考えたり、また「文化人」というような表現があって、それは画家やクラシック音楽の演奏家などを指すと思っている人が多いように感じる。しかし、「文化」とは人が誕生後に学習することによって身につけていくすべてのものを指すことばであり、したがって、食べ物、着る物はもちろんであるが、考え方やものの捉え方、行動の仕方など、目に見えにくい深い部分も文化なのである。そして、ことばはこのようななかなか目に見えない文化を映し出してくれる。

この小論では、日本語と他のいくつかの言語を観察・比較し、それぞれの言語に隠されている文化を読み取っていきたい。そして、ことばというものについて考え、ことばの違いは文化の違いであること、日本語はどのような言語で私たちが生きている日本文化とはどのような文化であるのかを意識的に考える機会にしたい。

1. ことばと思考

世の中にはいろいろな学問があり、さまざまな書物があり、またいろいろな歌もある。そして、これらの学問や書物や歌などの成立を可能にしているのはことばである。これらはすべて文化の一側面であるが、その中でことばは他の文化を可能ならしめる重要な要素であり、ことばが存在しなければ、どのような学問も成立しないし、書物も存在しないし、歌も歌えない。過去の歴史や文化を知ることもできないし、これからの歴史も残らない。このように、ことばは文化の「標（しるし）」（阿部 2007）であり、その言語を使用する人の思考を表す。着ている物などが外側の標であれば、ことばは内側の標と言える。

そのことばと思考の関係についてどのようなことが言えるのだろうか。例えば、洋服やネクタイを買おうと百貨店に行った人が何人かいたとしよう。その人たちが選ぶお店やコーナーも、実際に購入する商品（今の場合は、洋服やネクタイ）も人によって違う。大学という状況でも同じである。学生は同じ開講科目一覧表を見るけれども、同じ時間割の人を捜し出すのはかなり難し

いことである。ここで私が言いたいことは何かと言うと、目の前に同じものがあるからといって、人はそれに対して同じように反応するのではないということである。同じ商品を見ても、同じ開講科目表を見ても、人は自分の好みや関心にしたがって、同じものの中からどれかを選ぶのであって、皆が皆、同じものを選ぶのではない。

ことばについても同じことが言える。目の前に広がる状況や出来事が同じでも、皆がその中の同じところに着目し、それを同じように表現するとは限らない。むしろ、それは文化によってさまざまで、それをどのように言語で表現するかは多様である。例えば、日本語は「雨」についての表現は多数持っているが、「雪」についてはそれほど豊富な語彙や表現は持ち合わせていないと言える。一方、カナダの先住民であるイヌイットの人々の言語は、「雪」に関する語彙を非常にたくさん持っている。日本語で「降っている雪」、「地面に積もっている雪」、「半解けの雪」、「氷のように固まっている雪」といったように、その状態を説明調で表現する雪一つ一つに、イヌイット語は別々の語彙を持っている (Crystal 1987: 15)。また、極寒の地に生活する彼らは、どのような種類の氷また雪が人間の重さに耐えられるか、あるいは犬の重さに、あるいはカヤックの重さに耐えられるかを区別し、それぞれの氷や雪を別々の語で呼んでいる (Nettle and Romaine 2000: 16)。日常生活が雪と密接に関わっているイヌイットの人々にとって、氷や雪についてのこのような知識、またそれぞれの語彙は、自分たちが置かれた環境で生存していくために決定的に重要な知識であり語彙である。彼らはこれらの知識に、またこれらの語彙に、自分たちの命を預けてきたのである。(森光、中島 2009: 142-143)

また、アメリカ・インディアン・ホピ族の言語では、鳥以外の飛ぶものすべて——それが虫であろうと飛行機であろうとパイロットであろうと——を “masa’ytaka” という一語で表す (Crystal 1987: 15)。それは、鳥の羽がホピ族の伝統儀式などで欠かすことのできない重要な存在であるからであるが、日本語話者にとっては考えられないことである。

他にも例はいろいろとあるが、ここでもう一度考えてほしいことは、目に映る景色、目の前にあるものが同じであれば、すべての人間がそれらを全く同じように認識し、類似の表現をするだろうかということである。答えは NO である。イヌイットの人々は日本人とは全く違う目で雪や氷を見、表現し、ホビの人々は日本人とは全く異なる目で空を、飛ぶものを見て表現する。このように、文化によって、人間は異なる言語表現を持ち、異なる考え方をするのである。

このことばと思考との関係は複雑で、鶏と卵の問題と同様、「ことばが先か思考が先か」という議論を引き起こす。この問題についてはこれまでさまざまな議論がなされてきたが、現在では、「言語がその言語を使う人の思考の仕方に影響を与える」という考えが一般的に認められている⁽¹⁾。ことばと思考、いずれが先であるとしても、両者は密接に関わっていることに疑いはない。ことばにどのような文化、思考が隠されているか、さらに例を挙げながら見ていこう。

2. ことばを通して見える文化⁽²⁾

2.1 身体部位

この地球上には、黄色人種、白色人種、黒色人種、(オーストラロイド、) 男性、女性、赤ちゃん、子ども、若者、老齢期の人々など、さまざまな人種、性別、年齢の人が生きている。しかし、これらのさまざまな相違にもかかわらず、すべての人は共通する身体的特徴を持っている。どのような人種の人で、どのような皮膚の色、髪の色、目の色をしていても、男性でも女性でも、また年齢がどうであろうと、私たちは通常、一つの顔、一つの胴体、2本の手と2本の足、といったような身体的特徴を共通に持っている。ところが、このすべての人間に共通する身体の部位を示すことばについても共通しているかというそうではなく、その部位をどのように見てどのように表現するかは文化によってさまざまである。

例えば、日本語の「唇」は英語では“lip”というように、単純に結びつけていることがほとんどだと思うが、実は、「唇」と“lip”のそれぞれの語が指し示す範囲は異なっている(鈴木(孝) 1973: 43-45)。日本語の「唇」は『広辞苑』によると、まず「口縁(くちべり)」「(口のへり)」の意味で、「口腔が皮膚につづく部分にある上下の弁状の粘膜」と難しい説明があるが、要するに、赤みがかった、口の入り口にあって、口の中と口の回りの皮膚とを繋ぐ接点になっている箇所(女性なら口紅をさす場所)のことである。一方、英語の“lip”は、狭義には「唇」を指すが、広義には「鼻の下」あるいは口の周辺を指し、したがって、口髭が生える場所は“lip”なのである。もし、“His upper lip is short”という英文に出会ったら、「彼の上唇は短い」という日本語にしまいそうで、そういう日本語にした後に、「上唇が短い」唇って一体どんな唇なのだ、と考え込んでしまいそうである。しかし、この英語が言おうとしていることは「上唇が短い」ことではなくて、「鼻の下が短い」ということなのである。(鈴木(孝) 1973: 42-44)

さて、今、「口」とか「鼻」ということばが出てきたが、英語話者やヨーロッパ諸言語の話し手の多くは鼻の描写をすること自体をあまりしないようである。仮に鼻に言及する時は、鼻を欠点として捉えていることが多いようである。また、文化によっては、鼻の描写も口の描写も避ける傾向がある。トルコの複数の小説を調べた鈴木(孝)は、女性の顔を描写する際、目や眉、肌の色、髪などについての描写は細くなされているけれども、鼻と口については触れられていないと言っている。(鈴木(孝) 1973: 50-54)そして、小説の該当箇所を見ると、確かにそう言えそうなのである。

それは何故なのか。トルコはイスラム教の影響が強い国である。イスラム教では女性は近親者以外の男性に顔を見せることはタブーとされており、したがって、イスラム教の女性はベールで顔を覆っていることが普通であった。そうすると、女性の顔についてはベールで覆われていない目に見える部分だけがいろいろな判断の基準になり、描写の対象となる。最近はベールをはずしている女性の姿も見られるようになってきたが、それでもそう簡単に文化の深い部分は変わらないであろう。(鈴木(孝) 1973: 53-54)文化が表層的に変化し、ベールで顔を覆わない女性が

出現してきたからといって、文化の深層の部分まではなかなか変わるものではない。それ故に、先述の小説では、従来の枠組みにしたがって女性の顔は描写されていると考えられる。女性の顔の鼻と口の部分が現実には見えているとしても、その顔を描写する人には、それらは文化的には見えていないのである。「鼻と口については触れられていない」と言うよりも、正確には、鼻と口には文化のルールにしたがって、触れることができないのである。

2.2 親族用語

身体部位と同様、人種、性別、年齢に関係なく、あらゆる人に親族がいる。しかし、その親族をどのように捉えるかは文化によって異なり、それはことばで表される。

英語はさまざまな親族関係を表すための別々の語彙を持っておらず、通常、「誰々の何々」というような説明的で回りくどい言い方をしなければならない。それに対して、北アメリカやオーストラリア大陸の先住民の言語の多くは親族関係を表す語彙を何百語も持ち、親族関係それぞれを別々の語彙で表す。(クリスタル 2004: 86) イヌイット語に「雪」に関する語彙が多いことが彼らの生活における雪の重要性を物語っているように、一般的に、ある文化が何かについての語彙を豊富に持っているということは、その文化においてその何かは重要であることを示すマークーと考えてよい。

しかし、逆のパターンも見られる。アメリカ先住民言語の一つであるフォックス語では、一つの語が「叔父」、「大叔父」、「甥」を表し (ロメイン 1997: 32)、また他にも「父」を表す語が「父の兄弟」や「父のいとこ」たちまでをも表し、さらには「父の兄弟の子ども」はすべて「兄弟」あるいは「姉妹」になる可能性がある文化もある (クリスタル 2004: 87)。これらの文化の考え方は、親族関係が重要ではないということではなく、ある人に対して社会的に同じ立場にあり、また同じ責任を持つ人たちは同じ一語で表されるということである。

非常に多様な親族用語を持つ場合も、逆に、同じ社会的立場や責任を持つ人々を同一語彙で表す場合も、その部族の親族体系や社会構造を示しているのである。例えば、親を失った子どもにとって親と同等の社会的立場にあるのは誰か、その子どもを育てる責任は誰にあるのか、あるいは誰が近い親戚で誰が遠い親戚であるかなどは、すべてこれらの親族用語で示される。これらの用語は、生物学的事実よりも、親族をどのように捉えるかという文化的要因が優先された結果の、あるいは生物学的事実を考える時にその解釈に文化的要因が介入した結果の語彙である。つまり、親族をどのように呼ぶかを決定しているのは、生物学的事実ではなく、文化的要因である。(森光、中島 2009: 138-139)

2.3 方角の認識

人間は自分のまわりの世界を見、認識したものを言語を用いて表す。しかし、先述のとおり、目に映る情報が同じものだからと言って、その捉え方も人々の間で同じであるとは限らない。むしろ、それは文化によって非常にさまざまで、その違いは言語によって示される。

これはまわりの空間をどのように認知し、それをどのように表すかということにも当てはま

る。現在の日本語も英語もまわりの空間を切り分ける際には、「上」、「下」や「前」、「後」、「左」、「右」(英語の場合には、“up,” “down,” “front,” “back,” “left,” “right”)といった語を用いる。「上」と「下」は絶対的に定められた方角であって、天や空の方角が上、地面の方が下と決まっている。これは、逆立ちをしたところで変わらない。しかし、空間を水平に捉える時には、事情は異なる。日本語の話し手も英語の話し手も自分自身の身体を基盤として空間を捉え、自分の顔のある方向、通常足を踏み出す時の方角を「前」、背中のある方を「後」と考える。そして、それに基づいて「右」と「左」が決まる。つまり、日本語も英語も、空間を垂直に捉える際の「上」、「下」を除いては、空間を相対的に捉える言語である。人々は固定された方角を用いず、自己を中心として空間を捉えているのである。

さらに、この相対的指示棒を用いる空間表現は物体にも適用される。建物や車など、それ自体に方向が認められる場合、人間の身体を基盤にして見方が投影され、物体を人間の身体と同様に見なして表す。木や岩など物体自体に方角が認められない場合には、話し手の視点などから方角が決められる。

しかし、世界の言語を見てみると、このような空間の捉え方、表し方をする言語ばかりではない。特に、空間を水平に認識する場合が問題となる。方角を表すことばは言語によってさまざまで、例えば、「左」と「右」に相当する語彙はなく、すべてを「東」、「西」、「南」、「北」で表す言語もある。オーストラリア先住民言語のほとんどがこのような絶対的指示棒で空間を捉える。それがどのような言語なのか、やや詳しく述べよう。

2.3.1 オーストラリア先住民言語の場合

オーストラリア先住民の言語の一つであるグウグ・イミディール語について、Levinson (1997)、井上 (1998)、Haviland (1993) を参考に考えてみる。この言語の話者は、例えば日本語話者が自身の身体を基盤にして「次の角を左に曲りなさい」などと言うところで、「次の角を北に行きなさい」といった表現をする。また、「あなたの部屋の西側のテーブルの東の端に本を置き忘れてきた」と言ったり、本のページを飛ばして先に進むように指示する時に「ページを東から西にめくって、もっと東に行きなさい」と言ったり、「東」、「西」、「南」、「北」を用いてさまざまな状況を表す。そして、グウグ・イミディール語では、10語に1語の割合で方角を表す語彙が使われるというデータがある。

これらのことを考えると、この言語の話し手は常に自分が経験した(また、する)出来事の一つ一つについて、出来事を構成する一つ一つの部分について、その方角をすべて記憶しておかないと一言も話すことができないということになる。さらに、経験した出来事のどの部分を後で話すことになるかは経験しているその時にはわからないのであるから、どの部分を話すことになっても困らないように、常に方角に気を配っておかなければならないということになる。聞き手もまた、方角を把握しておかなければ、話し手の言う内容の正確な理解は不可能である。

絶対的指示棒の言語話者は、単に「東」、「西」、「南」、「北」で空間を認識し記憶しているだけではない。彼らの方角の認識の正確さも言及されなければならない。35歳から70歳以上のグウグ・イミディール語を話すアボリジニの男性10人を対象に行われた指差しの実験がこれを証明

する。その実験は、彼らに、木々に囲まれ視界が遮られているような場所も含めてさまざまな地点から、数キロメートルから数百キロメートル離れた、そこからは見えない場所を指差してもらうものであった。この実験は移動しながらさまざまな場所から行われたが、被験者が場所を移動する手段が徒歩であるのか（特にスピードの出ている）車であるのかや、次の場所までの移動がどれだけ複雑であるかなど、さまざまな要因が方角を割り出す計算に影響を及ぼす。それでも、合計 120 回の指差しの結果、誤差の平均値が 13.9 度であったというデータがある。さらに、場所を聞いてから指差しの反応までは、かかっても 2~3 秒以内で、即座の反応も多いことを考えると、彼らの方向感覚がいかに正確であるかがわかる。

さらに、一度記憶した方角についての情報は、長期間に亘って記憶されているようである。それはまた別の実験によって示された。ふたりのアボリジニの男性が経験した船の転覆事故を、事故の経験者の一人であるグウグ・イミディール語の話し手に 2 年の間をあけて 2 度話してもらった。その 2 回の語りで異なる設定は、出来事の語り手と聞き手が座っている方角の向きだけである。ビデオに収められた 2 回の語りを比較してわかることは、ボートが転覆した時の様子を表すジェスチャー、海に飛び込んだ時や岸まで泳ぐ時のふたりの位置関係を表す「東」、「西」などを用いたことばとそれに伴うジェスチャーのすべてにおいて、両者の方角が一致しているということである。つまり、グウグ・イミディール語の話し手は方向感覚において正確であるというだけではなく、一度インプットされた方角についての情報は記憶し続けるということである。

保莉（2004）も、あるアボリジニの男性が西から東への道跡についてある説明をする時に必ず一本の線を引くのであるが、コンパスを用いて確認したところ、その男性が「どの方角に向いて座っていても、必ず」「常に正確に、例外なく」その線は西から東に引かれていたと述べている（保莉 2004：116）。

以上のように、絶対的指示枠の言語話者の思考方法は相対的指示枠の言語話者のそれと異なる。絶対的指示枠の言語話者は自分がどの方角を向いているのかを常に認識していなければ、自分の目に映るものに絶え間なく注意を払い記憶しておかなければ、ただの一言も話すことも聞くこともできないのである。

2. 3. 2 日本語の場合

さて、今、オーストラリアのアボリジニの方角の認識の仕方についてやや詳しく述べてきたが、日本人の場合はどうだろうか。先に、日本人・日本語の場合は、「前」、「後」、「左」、「右」という相対的指示枠で空間を捉えると述べた。確かに、現代の日本語は空間認識および表現を相対的指示枠で行っているのが普通であろう。しかし、明治維新以降、西欧文明・西洋文化との接触が増大する中、その影響がことばにもあったと言える。今問題になっている日本人の身のまわりの空間認知の仕方また表し方も、西洋文化の影響で絶対的指示枠から相対的指示枠へと変わってきていると考えられる。（井上 1998：78）

その根拠は、日本語表現を歴史的に考察することによって得られる。日本では明治時代の初期までは、方位を判断するのに暦年を数えるのにも中国に起源を持つ十二支が広く用いられていた。1873 年に日本はグレゴリオ暦（新暦）を採用したが、実は現在でも干支の使用はさまざま

なところに残っている。生まれ年について話をする時、節分の日に恵方が話題になる時、私たちは干支を用いている。多くの日本人が方角の縁起をかつぐのは節分ばかりではない。おみくじにある方角についての記載や古くから存在している方違え所、丑寅の方角や北枕を避ける習慣などはすべて、絶対的指示棒で方角を捉えてきた日本人の行動を表している。「左」、「右」に基づく空間表現も『古事記』のイザナキとイザナミの話に見られるほど古くから存在するのであるが、「東」、「西」、「南」、「北」に基づく空間表現も同様に千年以上の長い間使用され続け、日本人の行動に影響を与えてきたのである。

つまり、空間を捉え表現するのに、日本語では相対的に捉える方法と絶対的に捉える方法の両方が平行して使われてきたということである。そしてその感覚はまだ強く残っているのである。ただ、現代の日本においては、日常の言語使用の場面では相対的に空間を把握し表現することの方が当たり前になっており、絶対的指示棒の「東」、「西」、「南」、「北」での空間認識およびその表現は限られた状況においてのみ使用される形で残っているとと言える。ここに西洋文化の影響を見ることができるのである。

2.4 擬声語・擬態語

日本語には擬声語・擬態語が溶け込んでおり、日常の話しことばや書きことば、また「どんぐりころころ」や「ピッチピッチチャップチャップ」などの童謡にも、ごく自然に使われている。そして日本語話者ならば、この擬声語・擬態語（混じりの表現）が何を言わんとしているかを理解することは容易にできる。では、英語でも同じように擬声語・擬態語は多いのだろうか。まず、日本語の擬声語・擬態語表現についてどのようなことが言えるかを考え、次に、日本語の擬声語・擬態語表現が英語ではどのように表現されているか実例を見ながら、英語と日本語の特徴を考えてみたい。

例えば、「ごろっと転がる」という表現を聞いた時に描かれる情景は何かが一度回転するところであるが、「ごろ、ごろっと転がる」と聞くと2度の回転を思い描く。さらに、「ごろごろごろと転がる」になると私たちは回転の連続が長く続く情景をイメージする。（喜多 2002：69-72）また、「ごろごろ」なのか「ころころ」なのかで、転がる物体の大きさや物体が転がる時に描かれる弧の大きさに関する情報が与えられる。

このような解釈はどこから来ているかという私たちのイメージなのである。つまり、日本語話者は擬声語・擬態語を用いることによって、物事や状態をイメージ的に捉えているということである。

擬声語・擬態語がイメージ的であるということを、さらに例を挙げながら、別の観点から見ていこう。「ピカッと光ったと思ったらドカーンと落ちた」、「古くなった餡がぺたぺたしている」、「学生をビシバシ鍛える」といった表現からわかるように、擬声語・擬態語は、人間が視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚という五感を最大限に活かし、それらから得られた情報をそのまま、何も加工せずに表現する方法だと言える。「ピカッ」は視覚に、「ドカーン」は聴覚に訴え、事象が生き生きと表されている。稲妻の閃光や落雷という事象を「抽象化」して表すのではなく、「原体

験そのものを」(喜多 2002) 鮮明に映し出している。「ぺたぺた」の場合も、「飴が皮膚にくっついて簡単に離れない状態になっている」などと命題化して表すのではなくて、原体験が「生のまま」(喜多 2002) 捉えられ表されており、人々の触覚に訴えている。「ビシバシ」では、その様子が目に見えるようでもあり、また「ビシ」や「バシ」という音が聞こえてきそうでもある。つまり、視覚と聴覚の両方に訴えている表現と言え、学生を鍛える状況をイメージすることが可能である。話し手は事態を直接体験する認知の仕方を擬声語・擬態語で表しており、仮にこれらの出来事が過去の出来事でも、「いま・ここ」で体験しているかのように表現することができる。そして、聞き手は話し手の原体験を追体験することができる。

日本語は、このように、その場その瞬間の印象をそのまま表わす方法を持ち、またそうすることに非常に適した言語なのであるが、一方、英語は客観的に誰がいつどこで何をしたのかを表すのに適した言語だと言える。したがって、日本語の場合に擬声語・擬態語表現で表されているものが、英語では命題的情報として表されるのが極めて普通である。例えば、「ぺたぺた」の場合は上述の飴の説明のように表されたり、「ビシバシ鍛える」を「多くを要求し厳しく鍛える」などと表したりするのである。

さらに日本語と英語の表現を比較し、それぞれの特徴を確認してみよう。

1. a. 「喪服を着て、よよよよと泣き崩れるのが似合う女は、哀れのほうに入りたいね」
「泣くときはよよ、だろう。四つは多いんじゃないのか」
- b. “A soulful woman is the kind who can wear black and cry her eyes out and look the part.”
“Just your ordinary sobbing will do.”

(巻下 1997: 83)⁽³⁾

(1a) には「よよよよ」と「よよ」の2つの表現が現れている。上で述べたように、擬声語・擬態語の形とその意味は類似しており、形の繰り返しは時間や状態の長さなどを表す。したがって、「よ」が2回の場合は通常の涙を表しているようであるのに対して、「よ」が4回繰り返されると、それだけ泣く時間の長さ、泣き方の激しさ、悲しみの深さなどがより強く感じられる。英語では、このイメージがそのまま命題的情報に変換されて、「よよよよ」と「よよ」はそれぞれ、“cry her eyes out (目を真っ赤に泣き腫らす),” “just your ordinary sobbing (普通に涙を流すこと)” と表されていると言える。

2. a. 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。
- b. Suddenly a gust of wind came through. The grass stirred, leaves rattled, and the trees groaned.
3. a. 「うわあ。」がたがたがたがた。
「うわあ。」がたがたがたがた。
- b. “Oh, no!”
“Oh, no!”

例 (2), (3) の (a) 文は宮沢賢治のイーハトヴ童話『注文の多い料理店』からの引用、それぞ

れの (b) 文はその英語訳 (Strong and Colligan-Taylor 2002) である。ここでも日本語の話し手は擬声語・擬態語を用いて表現することによって、視覚や聴覚などの五感を活かし、イメージ的に事態を捉えていると言える。例 (2) の日本語では、風の様子、草の音、木の葉の音、木の音、すべてが擬声語・擬態語で表されている。短い文であるのにもかかわらず、「どう」、「ざわざわ」、「かさかさ」、「ごんごん」という 4 つの擬声語・擬態語が出現し、そしてこれらの語だけで言いたいことが十分に伝わるという事実は、日本語における擬声語・擬態語の豊富さを示していると言えるだろう。一方、英語は (2 b) に示されるとおり、「どう」は “Suddenly a gust of wind came through (突風が吹き抜けていく)” の一部として表され、「ざわざわ」は “stirred (かすかに動く),” 「かさかさ」は “rattled (ガタガタ鳴る),” 「ごんごん」は “groaned (唸るような音を立てる)” という具合に動詞化され、また命題化されている。また、(3) の日本語の「がたがたがたがた」は (3 b) の英語では表されていない。完全にないものとされてしまっているが、日本語ではこの「がたがたがたがた」が表す意味は大きく、この擬声語・擬態語によって出来事に関わっている人々の様子が目に見えるようである。このことから日本語において擬声語・擬態語の果たす役割が大きいことが窺える。

宮沢賢治の「風の又三郎」の冒頭の一節にある (4 a) は、彼独特の感性を表す擬声語・擬態語の一つで、

4. a. どっどど どどうど どどうど どどう

b. Boom, wind, blow, wind, do-do-dow

「どっどど／どどうど／どどうど／どどう」と、音の響きで風が押し寄せるように吹いてくるイメージを表している。それに対する英語訳 (4 b) では「うなり」や「風」などを意味する “boom, wind, blow” が用いられている。また “do-do-dow” と、日本語の音をそのまま表記するより他に方法がない、と訳者が判断したような箇所も見られる。同じく「風の又三郎」からの例 (5), (6) は普段ごく一般的に用いられる擬声語・擬態語の例である。

5. a. 草からは、もう雫の音がポタリポタリと聞えてきます。

b. From the grass came the sound of water falling drop by drop.

6. a. 佐太郎、大威張りで、上流の瀬に行つてじゃぶじゃぶ水で洗いました。

b. Looking very self-important, Sataro went to the shallows above the pool and sloshed the basket back and forth in the water, rinsing it out.

(5) では「ポタリポタリ」が “(the sound of water) falling drop by drop ((水が) 一滴ずつ落ちる (音))” と、(6) では「じゃぶじゃぶ」は “sloshed (the basket) back and forth in the water, rinsing it out (水の中で (箆を) 前後に振って洗う)” となっている。このような、感覚に訴え事態をイメージ的に捉える擬声語・擬態語の例は日本語ではいくらでも見つかるが、一方、英語ではそれらのイメージがすべて命題的情報に変換され、多くの場合、動詞化される。辞書的説明になっていると言ってもよいだろう。また、擬声語・擬態語表現は必ずしも命題化された英語の表現と完全に一致するわけではなく、その一部として表されるなど、特定するのが困難である場合も多いのが現実である。

擬声語・擬態語の観察から見えてくる日本文化と英語文化の特徴は、以下のようなものであろう。すなわち、擬声語・擬態語を用い、事態を「いま・ここ」で体験しているかのように表現する方法を豊富に持つ日本語はイメージや感性・五感を大切にした事態の捉え方、表現の仕方と深く関わるのに対し、事態を客観的に捉え直し、命題的情報に変換して表す英語の文化は事態の捉え方も表現の仕方も分析的であるということである。この文化的特徴について、次の3でさらに深く考えてみよう。

3. 言語と文化の平行性⁽⁴⁾

ここまで、カナダやアメリカ、オーストラリアの先住民の言語やトルコ語など、いくつかの言語について、その文化との関わりを述べ、文化はことばに映し出されることを見てきた。ここでは、特に擬声語・擬態語の観察によって示されたことと関連させて、日本語と英語、そしてその文化との関わりをさらに深く考えていきたい。

上で示されたように、日本語と英語は根本的な部分で相互に大きく異なる。日本語話者はイメージや感性・五感を大切にした事態の捉え方、表現の仕方をするのに対して、英語話者は事態の捉え方も表現の仕方も分析的である。言語は文化の重要な一側面を構成し、その言語を使用する人々の思考と深く関わっている。そうすると、言語に見られる特徴はそれ以外の文化の側面にも平行するように見られるはずである。

日本語の擬声語・擬態語を観察することによってわかったことは、日本語話者が見えるようだ聞こえるようだというイメージや感覚に訴えることを大切にしてきたということである。月にうさぎがいて餅つきをしているという感性、月に団子や女郎花などをお供えし、月を眺め鑑賞し俳句を詠むなどという感性は、日本人ならではののではないだろうか。西洋科学の考え方は、月や火星にいろいろな探査機を打ち上げ、何事も科学的、客観的に分析し解明し、場合によっては支配していくというものである。方角の認識のところで述べたとおり、西洋化の影響もあって、日本人の感覚も変わってきたが、それでもまだ、「月にはうさぎがいて、餅つきをしているんだよ」というような話は子どもたちに伝えていっているだろう。

道端に人知れず咲いている花に対してでも、日本文化と英語文化とでは考え方や接し方が異なると、Suzuki (1960: 1-5) や Fromm (1982: 3-8) は言う。彼らはテニスン (Alfred Tennyson; 19世紀のイギリスの詩人) の詩 (例7) と松尾芭蕉 (1644-1694) の俳句 (例8) を比べ、興味深い観察をしている。

7. Flower in a crannied wall,
 I pluck you out of the crannies,
 I hold you here, root and all, in my hand,
 Little flower – but *if* I could understand
 What you are, root and all, and all in all,
 I should know what God and man is.

テニスン、散歩中に偶然見つけた花を所有したいと思い、根こそぎ引き抜き自分のものにす。そして、神や人間について知るために、花を解剖して客観的に分析し、どうなっているのかを調べたいと思う。花は彼の知的好奇心のために死んでしまう。Suzuki や Fromm はこの詩の中に、命を奪ってばらばらにしてでも真実を探索する西洋科学者の姿を見ている。

一方、私たちがよく知っている芭蕉の句、

8. よく見れば

なずな花咲く

垣根かな

はこれとは全く異なる。芭蕉は花を抜くどころか触れることさえしない。ただじっと見、心の中で何かを感じるだけである。その思いをことばにし概念化しようとはせず、最後の「かな」に自分の言いたいことのすべてを言わせている。日本には、道端の花をそのままにしておいて、そこで一句詠み、花を永遠に残そうとするような文化がある。「芭蕉が望んだことは、花を『見る』こと、自分が花と一体となることであり、そして芭蕉は花を生かし続けようとした」と Fromm (1982: 5; 筆者訳) は述べている。よく言われることであるが、西洋が自然を人間に都合よく利用するためだけの存在と解釈しているのに対し、東洋では人間が自然と共に生き、受け入れようとするところがある。ここに主体と客体の融合という禅の哲学にも通ずる心境を見ることができる。

鈴木（大）（1940）は、「欧米人の心といいコントラストをなす」「日本人の心の強味は最深の真理を直覚的につかみ、表象を借りてこれをまざまざと現実的に表現することに」あり、その「目的のために俳句は最も妥当な道具である」と言う（鈴木（大）1940: 165-166）。俳句は「詩人が頭で作り上げた修辭的表現ではなくて」、ただ「直観を反映する表象」である（鈴木（大）1940: 169）。それ故に、俳句の理解は「知的分析」を超えたところにある。「直観はあまりに内面的、個人的、直接的なのでこれを他に伝える」ために、手段として「表象を求め」るが、それが理解できない場合、表象は西洋文化に相応しい「観念や概念に形を変えられ」「知的解釈」を施される（鈴木（大）1940: 169-170）。

また、少ないことばの中に多くの思いを込める俳句の成立は、詠み手と聞き手（読み手）の両者の豊かな感性やイメージに依存すると言える。俳句の詠み手は聞き手の感性やイメージに訴え、聞き手が自分と同じ体験を追体験することを期待しているとも言える。

さらに、柏木（2004）の考察に基づいて、もう一点、議論を展開したい。柏木は生活のさまざまな面に見られる「しきり」について考察している。私たちはそれと気づかぬうちに生活のさまざまな面でしきりを存在させているのであるが、家の中の空間をしきるものに目を向けてみると、日本ではそれらは伝統的には、障子や襖、屏風、衝立、あるいは暖簾や簾などであった。これらは必要に応じて移動や取り外しができ、また外からの風、光、音、人の視線などを取り込みながら遮断するというものである。また、しきりは垂直にしきるものだけではなくて、例えば板の間と畳の部屋との段差や敷居もしきりである。畳について言えば、かつては畳の敷き方や縁の色また模様などが人々の階級をしきる役目をしていた。これは個人の意識面でのしきりに影響し

たと言える。

これらの日本に伝統的なしきりは個々人の感じ方や意識に影響を与えてきたと考えられる。日本人は障子や襖、暖簾などを日常的に暮らしの中に取り入れることによって、人の気配を感じて気遣うということをしてきたのである。つまり、しきりのこちらと向こうにいる人が相互に人影や物音に気づき、しきりの反対側の事態を察知し、イメージし、それに合わせて適切な行動を取る。時には、見なかったこと、聞かなかったことにしながら、常にしきりの向こう側にいる人の気配を感じて生活し、気を配ることを当たり前の作法にしてきたのではないかと考えられる。

このような日本文化の中に、20世紀の初め頃から、特に第二次世界大戦後、ヨーロッパ的な間取りが導入され、その結果、日本の住宅は中央に廊下が延び、その両側に壁とドアでしきられた個室が並ぶ家に変身した。西洋文化との接触によって日本に特有の文化は失われてきているかもしれない。それでも伝統的に障子や襖の文化を持つ日本人は、見えるか見えないか、聞こえるか聞こえないか、というイメージや感性、主観を大切にし、人間関係をも曖昧にする灰色の文化に生きてきたのではないだろうか。それは英語文化のような、壁やドアの、見える、あるいは見えない、という白か黒かのはっきりした文化ではないのである。

このような文化の特徴は見事にことばとして形に現れ、イメージの日本語と分析的な英語という対立を成しているのである。さて、最後に、日本語・日本文化を象徴する「イメージ」や「感性」、「曖昧」などが招くことばの問題に触れておきたい。それは「ことば」というものへの意識の問題である。

4. 「ことば」というものへの意識の違い

最後に考えてみたいのは、「ことば」というものに対する人々の意識である。人々が何かについてどのような認識を持つようになるかも、人が誕生後に学んで身につけていくものであるので、人々の意識も文化である。ことばにはこの意識（の違い）も現れる。

世界に目を向けると、多言語多文化主義の国は随分ある。また、国境線一本で他国と接している大陸には、地理的方言連続体と呼ばれるものが存在していることが多い。これらの方言連続体を区切る境界線は、政治的、また歴史的、宗教的理由などによって引かれる国境線とは異なるところがあるので、国境を越えて別の国に入ったからと言って言語も別の言語に変わり理解できないかと言えばそうではなく、相互にわかり合える場合があったり、逆に同一国内であっても地域によっては異なる方言連続体に属することばを話している場合もある。

そのような国も多い中、他の国々から海で隔たれ、「自らを統合された単一民族として規定する傾向にある日本」（米山 2006：303）に住む人々は、日本の国語は日本語であることが自ずと決まっていると思っているのではないか。皮膚の色、髪の色、目の色といった遺伝的に受け継いでいる要因と誕生後に個人個人が学ぶことによって身につけていく文化とを混同して考えてしまっていると考えられ、日本人なら日本語を話すと考えている人がほとんどであるように思える。

島国である日本がその歴史上ことばを（奪った経験はあっても）奪われた歴史も外国語を強制

された経験もないことが、日本人からことばというものの意味を考えることの大切さに気づく機会を奪っていると言える。「母語なんて自然に身につくものだ」、「適当に単語を並べれば言いたいことは伝わる」、「母語であれ外国語であれ、人と話をして通じるのであればそれでよいではないか」というような声はよく聞かれ、これはことばの訓練の必要性を全く感じていない日本人、ことばに無関心また無頓着な日本人が多いことを示している。ことばが文化の「標（しるし）」であるということに気づいていないため、その日本人から成る日本という国には言語政策が欠けている。

日本に今溢れているカタカナ語もことばへの意識の低さを象徴するものの一つである⁽⁵⁾。漢字や平仮名表記でよいものをカタカナ語で表したり、日本語で表現すればよいところをわざわざカタカナ語にしているという場合も目立つ。ファッション関係、音楽関係のものをはじめ、カタカナ語は至るところで使われ、それを特に何とも思わない人が増加してきているように感じる。

日本語の中のカタカナ語は文意を曖昧にしたり誤摩化したりしているように見え、書き手が実は言いたいことを明確に持たない、あるいは考えを持っていても、それを伝えることばを持たないのではないかという印象さえ与える。意図的に中身をぼかし、イメージだけを伝えようとしていると思える場合もあり、それは最近の職業名にもよく見られる。「ムービングアドバイザー」、「クリーンスタッフ」、「ライフマネージャー」などという職業名を見たことがあるが、これらの仕事が一体何をする仕事なのか、仕事の中身が曖昧にされてしまっていたり、全く見当がつかないという感がある。また、「インフォームドコンセントが普及しない原因としては、やはり一般的にアカウントビリティということが理解されていないので…」(加賀野井 2006: 38)とか、「ワールドワイドなストラテジーをデベロッパする」(加賀野井 2006: 95)といったような言い回しでは、情報を伝えるための肝心な部分がカタカナ語で表されているため、全体として何を言おうとしているのか不明瞭である。イメージで物事を伝えようとし、物事を曖昧にするという日本語・日本文化の特徴がカタカナ語という形で現れた場合、これは問題である。

意図的に中身をぼかし、イメージは伝えるが肝心な部分は誤摩化するというのでは、正確な情報は伝わらない。外国語の音をそのままカタカナに置き換えたもの、新しく造り出した日本でしか通用しないカタカナ語といろいろであるが、「マニフェスト」や「パブリックコメント」、「アクセシビリティ」、「オーナーシップ」、「オフサイトセンター」、「カスタムメイド」、「コンポスト」、「ネグレクト」、「フリーランス」、「リストラ」、「リードタイム」、「リターナブル」など、なぜ適切な日本語で表さないのであろうか。昨年聞くようになった「ワンストップサービス」、「ワンコイン弁当」の意味、またこれらのカタカナ語を使用することによって意図することは何なのか、見えにくい。国立国語研究所はカタカナ語をわかりやすい日本語に言い換える検討を進めたのであるが、外来語が多過ぎて作業が追いつかないと聞く。また、自治体が言い換え案を受け入れようとしなないと聞く。その結果、この種のカタカナ語はますます増加しているように思われる。

2008年1月に十年ぶりに改訂、刊行された『広辞苑』第六版に新しく採録された約一万項目のうちカタカナ語は4割弱、つまり約四千項目を占めている。辞書の役割というのは語の解説を

するというもので、新しい語が出現すれば、それについての説明をしなければならないのであるが、その前に認識しておくべきことは、日本語の辞書に掲載されるということは、その語彙が日本語として定着し、認められたということを意味するということである。つまり、この日本という国では、十年で四千語のカタカナ語を日本語として認めた、そしてその割合は新しく辞書に掲載された項目全体の約4割を占めるということになるのである。この数字と割合をどのように解釈すればよいのであろうか。私個人としては、いったい日本語に何が起きているのだろうかと恐怖心を抱かせる恐ろしい数字また割合であると感じるが、カタカナ語は曖昧文化では居心地がよいということなのである。

さらに、最近では、カタカナ語を省略あるいは短縮した形や「日英混交文」というものまで出現してきている。「コピペ（スレ）」、「ラケバ」、「コンボタ」、「メアド」、「クリパ」、「ハビバ」などの短縮されたカタカナ語や、「〇〇氏の ON」、「家具コレ in Autumn!」のような日英混交文は、公的な刊行物や電波などを通して得られたものである。

通常、変化が見られるのは内容語と言われる種類の語彙で、名詞、動詞、形容詞、副詞（の一部）がそれに当たる。例えば、新しい物が世の中に誕生すれば、それを表す語彙が新しく必要になるし、逆に、消えていく物を表す語彙は消失していく。しかし、「家具コレ in Autumn!」のような日英混交文では、日本語、カタカナ語の略、英語が混ざった上に、その語順という、通常、変化が起こらないと言ってもよい文法面での変化も生じている。また、平板化という音声面での現象も起こっている。NHKは「日本放送協会」という日本を代表する放送局であるにもかかわらず、「アクセント辞典を若者コトバに沿って書き換える動きがある」という（古関 2000）。

さらに、一層問題だと思うのは、話しことばだけではなく書きことばにも変化が見られるということである。特に最近気になっているのは引用符である。NHK や新聞などで、次のような表記の仕方を見る。

9. a. オバマ大統領の“盟友”。
- b. 船長は“国の指示だと思って従った。”と話しています。
- c. 「普通の状態が“とんでもないこと。”を生み出す。」

(9a) の“盟友”は本来、「盟友」と表記されるべきである。(9b) の場合も同様に、“国の指示…”は「国の指示…」と表されるべきである。また(9c) の“とんでもないこと。”は『とんでもないこと』となるべきであろう。しかし、いずれの場合も “ ” を引用符として用いている。この表記方法は、思うに、(10) に示されるとおり、

10. 「 」 + “ ” ⇒ “ ”

という足し算で造られたものだと考えられる。つまり、西洋語の引用符（“ ”）を日本語的に変形させた形である。

このように、日本では、個人のレベルでだけではなく、国を代表する情報媒体のレベルでさえ、国民にことばを教えるという意識を持つどころか、逆に、流行のことばに迎合したり、妙な記号を造り出したりしている。日本という国がこの国のことばをどのようにしたいと考えているのか全く見えず、ことばに対する日本人の意識は低いと言わざるを得ないだろう。

さて、なぜ日本語が曖昧文化、灰色文化の言語だと言われるのかへの答えはいくつか考えられるが⁶⁾、言語教育の面から見ると、日本の国語教育が作者の意図や主人公の気持ちを汲み取ろうとすることに重点を置く教育であることも影響していると言えるだろう。西洋諸国の母語教育（また外国語教育）が自分の言いたいことを正確に効果的に発信する方法を学ぶ徹底した「言語技術教育」、ことばを「効果的に操るための技術」教育（三森 2004：249；傍点は筆者）であるのに対し、日本のそれは相手が何を言おうとしているか、相手の発言の意図は何かを読み取ることに神経を注ぐ教育なのである。

今、学校教育のさまざまなところで「コミュニケーション能力の育成」を目標の一つに掲げているが、その一方で、自分のメッセージをいかに伝えるかによりも、相手の気持ちや発言の意図を理解することに重きを置く母語教育では十分なコミュニケーション能力は育たないであろう。自分の意見はいつまでたっても曖昧にしか言えない人を生み出すことになりはしないかと危惧する。

さらに、イメージしか伝えられないカタカナ語の蔓延をコントロールすることができない日本という社会は、ことばに無頓着というか、ことばの力を知らないというか、ことばへの意識も曖昧なのである。繰り返すが、日本という国には、国としてこの国のことばをどうしたいのかという言語政策、ことばへの意識が大きく欠けていると言わざるを得ない。

おわりに

ことばは文化の中心的存在であり、文化を映し出すものである。したがって、ことばを見れば文化が見えるし、ことばが異なるということは、それだけ文化も違うということを意味する。この小論では、カナダやアメリカ、オーストラリアの先住民族の言語やトルコ語、英語、日本語の違いから文化の違いを読み取ってきた。

日本語から読み取ることのできる文化は、「イメージ」や「感性」、「曖昧」などということばで象徴されるだろう。別の機会に詳しく述べることにするが、歌詞を理解できないのにもかかわらず洋楽を好む日本人も多いことや、外国映画の鑑賞の仕方について、日本人は西洋諸国の人々と比べて、音声吹き替え版ではなく字幕で映画を楽しむ傾向が極めて強いという話を聞いた。さまざまな言語現象ばかりでなく、これらについても、やはり日本文化の「イメージ」や「感性」の特徴で説明できると考える。そして、これらの特徴故に、カタカナ語の問題なども指摘されたのであるが、日本語・日本文化であればこそその強味とも言える特徴も述べてきた。

今、世界に目を向けてみると、西洋化の現象は至るところで見られ、英語の勢いも増す一方である。その結果として、文化や言語の多元性が失われる危険が生じる。現在、2週間に一語の割合で言語が消滅しているというデータもある。生物学的多様性と言語的また文化的多様性に重なりがあることは多くの研究者によって指摘されており、もし世界の言語の多くが死を迎え、言語・文化が単一化に向かった場合、これは人類にとっての不幸であることは明らかである。

故に、私たちはまず日本人として、日本でも大きな勢力を持つ英語とどのように付き合うべき

かを考えなければならないであろう。なんとなく日本語を話し、なんとなく英語を学ぶのではなく、もっと意識的に、真剣に、「ことば」というものに向き合うべきである。日本語は日本文化の表れであり、英語は英語の文化を持つのであるから、西洋（特に、アメリカ）文化との接触が日本語と日本文化に少なからず影響を与える事実を認識し、日本人のアイデンティティーである日本語・日本文化をどのようにしていくのかを国も個人としても考えていく必要があるだろう。

ことばに変化を及ぼすのは異文化との接触ばかりではない。人間による自然破壊、地球温暖化の現象などもことばにさまざまな影響を与え、今回取り上げた先住民の言語も、英語をはじめとする西洋語と自然環境の影響により、変化を免れないのが現実である。

自分の使うことば、他の人々の使うことばを意識的に観察し、そこにそれぞれの文化があることがわかれば、自分のことばを大切にすると同時に、他の人のことばも大切にしなければならないと気づく。世界の人々が互いの文化、ことばに敬意の念を払い、それぞれの文化、言語がその独自性を保ったまま、対等に存在する世界に近づけるよう、私たちは努力し覚悟を持って臨まなければならないだろう。

注

- (1) 言語と思考の関係については、これまでさまざまな議論がなされてきた。大きく分けると、両者は同一物であるという仮説と両者は別物であるという仮説が中心であるが、さらに、後者は、言語は思考に依存するという見方と思考は言語に依存するという見方に分けられる。思考は言語に依存するという立場を取る最も影響力のある考え方はサピアーウォーフの仮説と呼ばれるものであるが、現在一般的に受け入れられているのは、この仮説を緩めて主張したものである。
- (2) 森光、中島（2009：第2章および第4章）も参照。
- (3) (1 a) は向田邦子の『思い出トラUMP』からの引用、(1 b) はその英語訳（Adam Kabat (1992) *A Deck of Memories*）である。
- (4) 森光、中島（2009：234-241）も参照。
- (5) カタカナ語の分析については、森光、中島（2006）および（2008）も参照。
- (6) 日本文化を説明する特徴として、「同質文化」、「グループ志向」、「謙遜志向」、「依存志向」などがよく言われる。

参考文献

- 阿部珠理（2007）「母語と国語のはざままで——インディアン同化教育の悲劇と言語復興」『月刊言語』1月号 第36巻 第1号、東京：大修館書店、pp.50-53
- Crystal, David. (1987) *The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- クリスタル、デイヴィッド（2004）『消滅する言語——人類の知的遺産をいかに守るか』東京：中公新書。（Crystal, David. (2000) *Language Death*. Cambridge: Cambridge University Press. 斎藤兆史、三谷裕美訳）
- Fromm, Erich. (1982) *To Have Or To Be?* (リプリント版)、東京：金星堂。（Fromm, Erich. (1976) *To Have Or To Be?*）
- Haviland, John B. (1993) "Anchoring, Iconicity, and Orientation in Guugu Yimithirr Pointing Gestures." In *Journal of Linguistic Anthropology*. Vol.3, No.1, pp.3-45.
- 保刈実（2004）『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』東京：御茶の水書房
- 井上京子（1998）『もし「右」や「左」がなかったら——言語人類学への招待』東京：大修館書店

- 加賀野井秀一 (2006) 『日本語を叱る!』 筑摩新書
 柏木博 (2004) 『「しきり」の文化論』 東京: 講談社
 喜多壮太郎 (2002) 『ジェスチャー——考えるからだ』 東京: 金子書房
 古閑須磨子 (2000) 「コトバ文化の国で」『月刊言語』 8月号 第29巻 第8号、東京: 大修館書店、pp.6-7
- Levinson, Stephen C. (1997) "Language and Cognition: The Cognitive Consequences of Spatial Description in Guugu Yimithirr." In *Journal of Linguistic Anthropology*. Vol.7, No.1, pp.98-131.
- 森光有子、中島寛子 (2006) 「小学校英語教育を考える——児童英語教育におけるカタカナ語の影響に焦点を当てて」『相愛大学研究論集』 第22巻. pp.69-91
 森光有子、中島寛子 (2008) 「日本に溢れるカタカナ語とその影響——大学生のカタカナ語の認識と英語学習」『相愛大学研究論集』 第24巻. pp.67-97
 森光有子、中島寛子 (2009) 『英語 vs. 日本人——日本人にとって英語とは何か——』 東京: 開文社出版
 Nettle, Daniel and Suzanne Romaine. (2000) *Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages*. New York: Oxford University Press.
- ロメイン、スザーン (1997) 『社会のなかの言語』 東京: 三省堂. (Romaine, Suzanne (1994) *Language in Society: An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford University Press. 土田滋、高橋留美訳)
 三森ゆりか (2004) 「母語での言語技術教育が英語の基礎となる」 大津由紀雄 (編) 『小学校での英語教育は必要か』 東京: 慶応義塾大学出版会、pp.245-276
- Sapir, Edward (1921) *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace.
- 鈴木大拙 (1940) 『禅と日本文化』 (北川桃雄訳)、東京: 岩波書店
 Suzuki, Daisetz Taitaro (1960) *Studies in Zen*. London: Unwin Paperbacks.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 東京: 岩波書店
 ウォーフ、ベンジャミン・リー (1993) 『言語・思考・現実』 東京: 講談社. (Whorf, Benjamin Lee (1956) *Language, Thought, and Reality*. Cambridge MA. 池上嘉彦訳)
 Wurm, Stephen A. (ed.) (2001) *Atlas of the World's Languages in Danger of Disappearing*. Second edition. UNESCO Publishing.
- 米山リサ (2006) 「多文化主義論」 綾部恒雄 (編) 『文化人類学 20 の理論』 東京: 弘文堂、pp.302-319

辞書

新村出 (編) (2008) 『広辞苑』 第六版、東京: 岩波書店

引用例のみの出典

- 卷下吉夫 (1997) 「翻訳にみる発想と論理」 卷下吉夫・瀬戸賢一 『文化と発想とレトリック』 (中右実 (編) 「日英語比較選書 1」) 東京: 研究社、pp.1-91
 宮沢賢治 『注文の多い料理店』 (新潮社. 1990)
 ———. 「風の又三郎」 (『銀河鉄道の夜』 集英社. 1990)
 Strong, Sarah M. and Karen Colligan-Taylor (2002) *Masterworks of Miyazawa Kenji*. International Foundation for the Promotion of Languages and Culture.